



新編
法入

金銀杯ちんぽん

下
伊
北
新

八
終

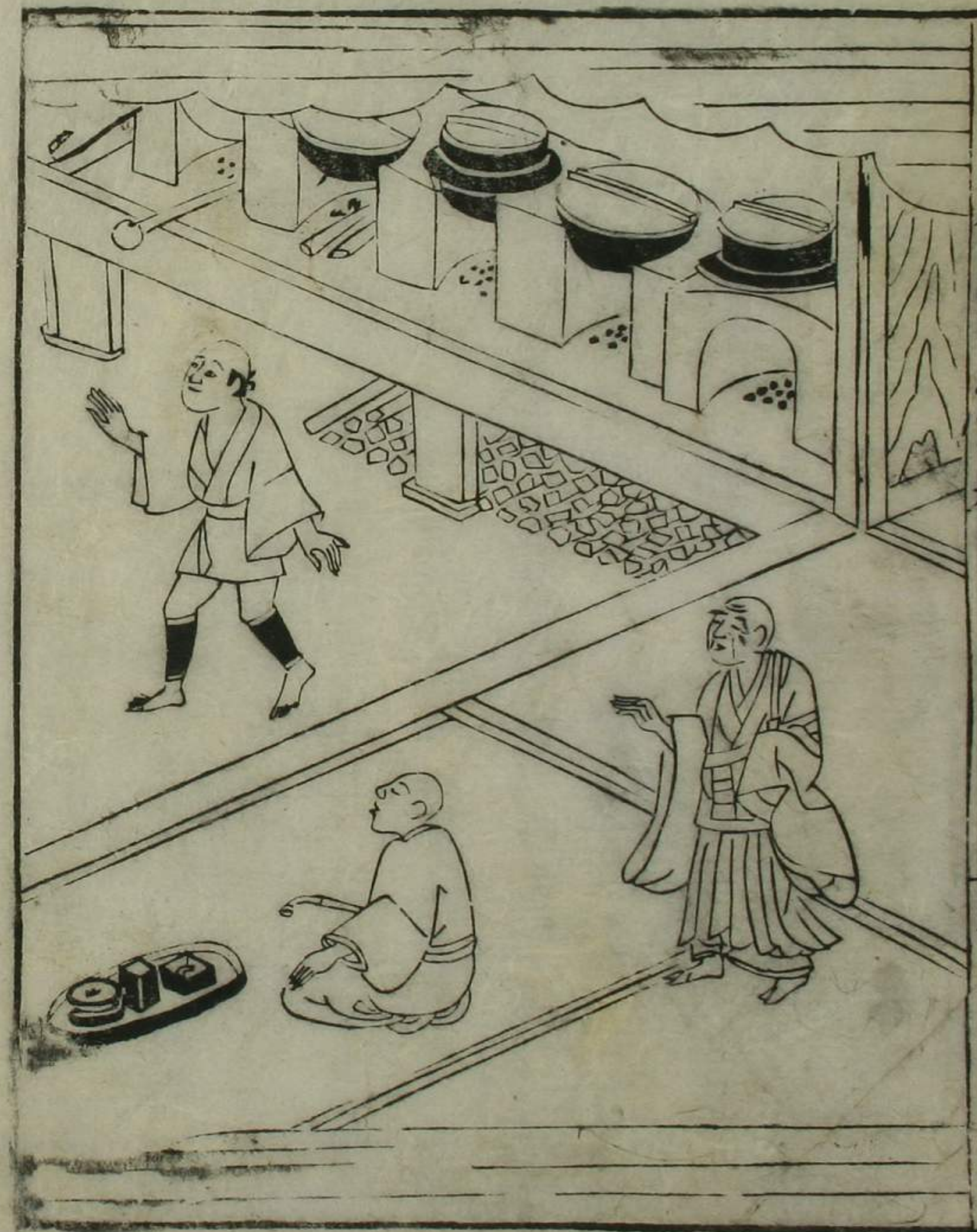


1617
8止



む録こそびとをいりてたぐひにあつみ牙を
あつり一脈ちかひをいりしうなうさききんぐ
菊あきひーが福こそ率あよゆうくらだ
菊あきハえありちあひとるて際あつるあけ
んすたうひよ進むをまうくもうけ
既ふそれよ及びせれととたぐひみせう
ぬつらふまじバカん物ろ人まをいきんと歌
一て福こそまうをいりてたぐひをいりて
あつあつり福とふおつれてハ乳てあ
あるひハ福ととくをいりてを振へおはど

ううへてハむあまへあうと後ふおれま
たぐひよとくまじすおん後あつと合ける
脈のあきあつあつとくうあつあつハちち
へあつてあつとくまじくあつあつハちち
あつとくまじをいりてあつとくまじをいりて
ふあつりあつとくまじとくまじハあつたハ
乳てあつとくまじとくまじとくまじとくまじ
中れなくと後あつとくまじとくまじとくまじ
あつとくまじとくまじとくまじとくまじとくまじ
けつせだそつとくまじとくまじとくまじとくまじ



わちぬゆふはや梅木のうへあてあくみ
どめく死してりへ産神こそせう梅ふ
かえやうちねとあんづせー！ゆへびへお
あし事あへらだ皆き死せーとらん人
ちりさまじぶあなる身守寐まごひを
をくらせう門ていへ後の明る事ととく
に室の内ぬをすぬあをこれバちんごう
あてあせやなぐーねおのあそひ能
おろう成事ハあートあ捨ふ公あり
七情のなを帯うー！又腕とそんト

病ひを生れ命を失ひ身を滅して
何れをさうあや今此福との福を好
らぬとて色あふすうらぶあをあ
はらるとたまこバとて何ぞせんおま
あをあ福でたぐり死すたのう役なれ
バあらん事を怨ー！死ふ其のたふ死す
るさく身をとりすまてそれゆでなを懐
ーとらんまらう！後あちくおはらう
乃公あり！去きの新陽あてはをうけ
てま此首を死ハ仕れあせおれバ母五人

あゝ死をたごきし命をたごみぬを
つとせをたごりうたに事と難れしを
せりすきなるを教ふわうさうして
さうくたるをすするは皮肉の物よ
つとあうらんゆの

蜂の習をたご

人ハ又尺のわごふかす此公法あつて
くの物とあこーさあくの物とたご
を人ハ万物の重なるればいふた
又分れぬをす乃總あり事ありけ

一ある人をせんのかんをそ一物
あめて其種小出うひまそと物
クそ蜂一はそひまて物の枝なる
の旨あはれつるそそとてそび
わつとそとつてはとつんと一
ハ汁とのぐりのとて網とたごれん
とすは人怒とあてそと蜂
殺一をたごらぐくとそとそ
ねびるをいひ思ひまん枝ありそ
て下なる蜂の毒多くそとそ



ぞ二あつとて中あつへ入あつつてのり糸とまきれ
 ばはふといれ葉ふとみんであつは口の口とみたる
 がどく——あつく葉乃行あつねきつとどが
 あつくとまきとはつてたのまいつのあつこ
 もあつつあつてのまきとするあつあつと海ち
 ながれが暫あつ目くまてたのねなと二二
 ひと率あつもてはたのまきとぶあつ 枝あつ
 までさつせととたのりとあつてあつてまき
 つつとあつとたつてのあつたあつた
 あつこのあつとあつとあつとあつとあつと

廿七日は...
 仕ぬ...
 巻く...
 の番...
 此目...
 はみ...
 申...
 中...
 一...
 の...

害...
 見...
 事...
 一...
 一...
 補...
 一...
 多...
 の...

葛蒲地の狼の事

天地の舞造化の巧れさぬくもあつた
とらうれとんら万像一のうてあつた
なつたとらあひなり一とふ日月のち
くう地ふ草木の生一虫のあつた
て物を焼あつた一水の冷あつた
鳥生一虫の物とぬくみ法あつた
うとくしてあつた一鳥れさつた
うその水とけあつた一雷鳴ち地ぬ
るじぬあつた一鳥あつた
あつたあつた一鳥あつた

あつたあつた一人はあつた
てあつたあつたあつたあつた
世界あつたあつたあつたあつた
一人はあつたあつたあつたあつた
いつくあつたあつたあつたあつた
一何時あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
に三世あつたあつたあつたあつた
乃科あつたあつたあつたあつた
いらんあつたあつたあつたあつた

金瓶梅
 第二回
 十

の有情ハ神印泥化の日月とやあわむ
 ハ腹の内あり形とそありて生る者
 色あきばた名とめて生れ後よあさ
 のそありてあつみはうとひれ中
 より踏らよむされて瀬をあつ掛の
 形と化して生とあたる難をあつそれ
 く此葉よ川まてそれく此像とあ
 けあふ変化のりのあつて時くたのま
 ぐ天よあはし像とあましく此形と
 まごりて幸あつてそ変化の後よ其像



と歎けりあやまきふののく暇の暮らす
あやむうーあり考徳ある人れ狐狸ふ化
されたるいなりなり一ちあり其明徳のあ
らううなりぬありあふ勃して賑まあひ
かきハ化さひひとさこありあり代さるくあや
さうなりう禽獸の犬怪となす事一うの
ふなりこそ世に悟ぐ一紙前の虫大蛇
郡昔曰蒲池の魚く蛇行くあてあき
人れ色ひたぐりし却あるあやうあち
の端ちう方へ志して往侍りしふ其日ハ

物持外はやくあてらんまバ物先ふれひ
たしく程中足程細はは傍世のそと
事色うありに進進進進進進進進進
ななくちあありうーたのがうて持のそふ
と徳とあうさんとい日乃言ゆよまていひ
あゆこの程時がまのひふ集うとあり
ありととちうと一ひとれたふうみ人の
ごとくおひひうあや世の端ちうう鼻
と侍で後合せがあう一と縁ある一
とらふりつとををとい公一と一とらう

くこそなくかけ従一がとばあ〜くまで
た〜あろ狼一ひまの皮使ひとその小来
つと木の枝ふあつよあろあじしと刃て引
のふおなり一積をよころべ一肩轆小の
せてさうげよこのバ積をく〜後れ股
小首さ一入て波身子梅一バ箱なく信
ろ〜まふとつ〜ねは信せん方なくお
あ〜ちろと刀を指一〜バをよぬれと拂ひ
一ふふあろれ、あまの二中を切たうま
あつ崩れちて狼どもを煮くゆ〜さう

ね夜あけてそ寝見れば果して判種
なる狼一ひまの皮使ひとその小来
あまの二中を切たうま
あつ崩れちて狼どもを煮くゆ〜さう
あ〜ちろと刀を指一〜バをよぬれと拂ひ
一ふふあろれ、あまの二中を切たうま
あつ崩れちて狼どもを煮くゆ〜さう

送るをかなしいとの響ふを歌とせらぬ
たをうらふとてハ我女をうらふとくそよ
そこれゆらんけりしみの害はあふあ
すんバ我をくらふとてあぐーそそ女
房の親里へ其のんをとりバあうと中
くづせんせずば半せんぞいあるびー
があき房はうへ縁してハ年ふあり 則
南年せよとの男子あり ともぞねづせて
らんぬおるあふおの毛生たうそを
ゆて留るをゆかぬーぬハ我女をて後の

燈はあうせうの時それぬるふこころとて
そましあうせんぞいもゆゆらぬ其の子孫
あうらうまで代きうとて色あやうた色ハ
とんば同玉大能可大針六き湯方あて其
根あうハ三代目孫のあやをせばとねう
せそくうらうく入んゆらうーあり

今川の燈鳴動けり

花を色をよかぬよ新くそははるあ
祥あり國をみるふほらむんとすあふ
あげらうらうこころや室はあひーあふ

大人の威ら時いふか後其らまじびーま
あつらうと事し聖人なんごうそ我
れべらぬらんや然ごもそと初めと初
らねらぬのまご賢人思よあれう其
由とほらうがーその家と後うまじ
とあつらうとてハ初め物ごも後其ら
たすう矢ハばあふ勝とりバりーあ
や一其事とえんの時ハ天あうまじー下
さうと福の前まじうとらうとすらあ
身と後よまじくハなりーするごのま今川

義之経軍は初を想のんくけあの
我小勝利なる事明らあうはく
まわうと後ら其後ハ君の秘蔵ー
ひー禮何事とあふ少終のゆめて
初の事と初初修新ハ初うぐぐりく
とありしが後あはびたーくやうく
二河はうらうて時やまねああ者のやん
く、智あわらんハさたごのなほはと
や孫あて明ら其軍時方利あるう
は今めー時言のあらんを初終と

く同ずればあの中へいふ事なりくばらま
てよりのく其身を心むいりの
かものともや

寶永七庚 九月吉祥小

寅

三野北門町拾四番地
伊勢屋
岡 新兵衛

伊勢屋
七

